

News Letter

Graduate School of Education

巻頭言 稲垣 恭子 研究科長・学部長 ②

名誉教授から 高見 茂 ③
田中 耕治

研究ノート ④

教員から 田中 智子 教育学講座 准教授
院生から 花田 史彦 生涯教育学講座 博士後期課程2年
社会人院生から 湊本 祐也 教育方法学講座 修士課程2年(専修コース)
留学生から 呉 桐 教育社会学講座 修士課程2年

活動報告 ⑥

臨床教育実践研究センターから
岡野 憲一郎 臨床心理実践学講座教授 臨床教育実践研究センター長
教育実践コラボレーション・センターから
石井 英真 教育方法学講座 准教授
国際交流事業
グローバル教育展開オフィスの設置について

若手研究者出版助成事業 ⑨

諸記録 ⑪

1. おもな出来事(2016.11.1～2017.3.31)
2. 入試結果(H29年度)
3. 学位授与件数(H28年度)
4. 教育職員免許状取得状況(H28年度)
5. 外部資金受入れ(H29年度)
6. 科学研究費補助金(H29年度)
7. 人事異動(2016.11.1～2017.4.30)
8. 教員寄贈図書リスト(2016.4.1～2017.3.31)
9. 基金納付者リスト

諸報 ⑬

新任教員・事務職員紹介



京都大学 大学院教育学研究科ロゴマーク

このロゴマークは、京都大学学術情報メディアセンターの客員教授・奥村昭夫先生のデザインです。奥村先生は、ロート製薬、グリコ、牛乳石鹸などのロゴマークやパッケージなどを手がけた著名グラフィックデザイナーです。本研究科・学部の「育ち」「つながり」「先端」といったキーコンセプトをもとに、教育学部本館の正面玄関を見守るクスノキの葉をモチーフとし、緑のグラデーションで成長の変化、中央の空間でこれから生まれてくるものを表わし、全体として両手で優しく包み込むイメージのデザインとなっています。

改革の日常化のなかで



教育学研究科長・学部長 稲垣 恭子

国内外を問わず旅行に出ると、日常の生活から離れて普段とはちがった出会いや経験をすることで、ちょっとした高揚感や開放感を味わうことも少なくない。旅先でリフレッシュすることで、ルーティーン化した日常生活を見直し活性化させる機会にもなる。こうした「旅」の魅力は、それが一時的なものでいずれまた日常に戻るのだという安心感に支えられてもいる。いわば、定住を前提とした「旅」の魅力である。

しかし現在のように、学校でも仕事でも移動が日常化してくると、「旅」のもつ非日常性もだんだんと薄れてくる。そうなると、安定した地元志向や田舎暮らしにかえて口マンを感じたりする。いわば「移動」のほうが常態化し、「定住」が非日常になるという逆転がおこるわけである。

こうした定住(安定)と移動(変化)の関係は、大学改革の状況にもいえそうである。たしかに、制度や組織が同じ状態で長く続いていくと、マンネリ化したり時代や社会のニーズと合わなくなって機能不全になることも少なくない。そうした場合には、改革は硬直化した組織に新しい風を引き入れ活性化させる原動力になる。

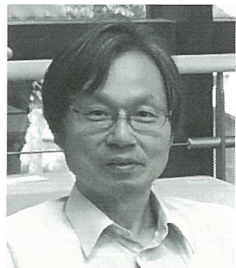
しかし近年は、改革のほうがちろろ常態化しつつある。中期目標にそって組織や制度を見直し改善していく持続的な改革自体が制度化されているといってもいい状況である。安定した制度が後退し、フラット化や液状化が進む流動的な社会状況に対応していくためには、こうした持続的な改革が必然の方向ともいえる。

そもそも戦後の新制大学は、天野郁夫氏も指摘しているように、必ずしも明確な目的を掲げて出発したわけではなく、現実には複雑な力関係が錯綜するなかで曖昧な形のまま始動したという経緯がある。大きく括れば、戦後の大学は常に修正と改革を繰り返してきたといってもいいだろう。

とはいえ改革と変化の歴史のなかでも、変わらず維持されてきたものも少なくない。学風や学部文化、学生文化などが独自の研究・教育スタイルを創ってきたところも大きい。現在のように改革の常態化が進む状況においては、これまで教育研究のなかで共通の文化として創りだし維持してきたものをあらためて見直すことも、重要な課題になっているように思えるのである。

教育学研究科でも、平成30年度から、大学院を中心として新しい組織へと再編する方向で準備を進めている。組織再編とともに、カリキュラムや大学院入試の方法も大きく変わる予定である。研究科にとっては、大学院重点化以来の大きな改革になる。この組織再編を機に、研究科のこれまでの蓄積を土台として、研究と教育が連動した先端的な教育研究の拠点形成を目指している。

教育学研究科・教育学部は、平成31年に創立70周年を迎える。6,000人を超える卒業生・修了生を送り出してきた実績と伝統の創造力を生かして、新しい研究・教育拠点となるべく取り組んでいきたいと思っている。



高見 茂

ニューフロンティアの開拓—ノーベル賞候補の育成—

教育学研究科の皆様、お元気でいらっしゃいますか。私は、4月1日付で白眉センターに異動致しました。教育学研究科在職中、特に昨年度研究科長・学部長在任中はたいへんお世話になりました。改めて厚く御礼を申し上げます。

皆様とお別れしてから、早や2ヶ月が経とうとしております。同じ学内ですが教育学研究科とは全く違う職場環境で、まだまだ職務に慣れるのに精一杯の状況です。しかし研究室は、学術支援棟の2階の東南に面した陽当たり良い広い部屋で、風水の観点からも隠居の身には最高の条件が整っており結構気に入っています。

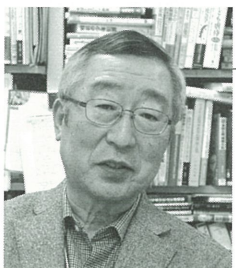
大学の教師になって30有余年、主に20歳前後から30歳ぐらいまでの学生さん、院生さんを指導して参りましたが、こちらのセンターでは30歳から40歳過ぎの研究者が対象となります。彼らの専門分野も理系・文系に亘って幅広く、私の研究分野とはかけ離れており、聊か戸惑う事も多いのですが、何故か新鮮な感覚を覚えセンター主催のセミナー(2週間に1回)を楽しんでいます。白眉プログラムに採用された人たちは、30倍、40倍の競争を勝ち抜いた

人達ですからさすがに優秀です。センター主催のセミナーは、参加者が日本人だけの場合も使用言語は英語でなされており、議論の論点に関わる微妙な表現も英語で見事に遣り取りをしています。

こうした事情に照らしてみますと、教育学研究科の迅速な国際化対応の必要性—英語での論文執筆、プレゼンテーション、ディスカッション等の情報発信力の強化を急ぐ必要性を強く感じております。また白眉研究者と議論する中で、白眉プログラムと教育学研究の新たなコラボレーションの余地があるような気がしております。機会があれば教育学研究科の皆様方と意見交換や交流をさせて頂ければ幸いです。

また、今年の白眉プログラムの公募審査では、教育学研究科の先生方にも審査をご依頼しご負担をお掛け致しました。この場をお借りして御礼申し上げます。今後とも白眉センターへのご支援をよろしくお願い申し上げます。

教育学研究科の益々のご発展を祈念しております。取り急ぎ御礼と異動のご挨拶まで。



田中 耕治

怒涛から静寂へ?

五月の連休後半になって、この小文を書き始めている。振り返ってみれば、この三月から四月は、まるで怒涛が打ち寄せる日々であった。よくまあ、風邪もひかずに乗り越えたものよと感慨にふけている。

その怒涛は、3月4日に行った最終講義から始まった。正確に言うと、最終講義の準備に取り掛かった1月頃から、予兆はあった。「抵抗」はしたものの、最終講義を行ったことは良かったと思う。何よりも、自分なりの「振り返り」に集中して取り組めたからである。京大に勤めての20年間は、時間感覚から言うと、それまで務めた私立大学での5年間、国立の教員養成大学での8年間と比べると、はるかに短い。京大時代は、流行り言葉でいえば常に「未来志向」であったと思う。「振り返るな、前進あるのみ」と叱咤した日々であった。最終講義の準備では、今までに書き溜めた拙文を読み返し、自分なりの研究の節目を確認することができた。

この最終講義の準備と並行して、引っ越しの準備が加わることになる。およそダンボール箱120箱となった荷物

を整理していると、購入した記憶さえ覚束ない書物や懐かしい写真類や研究会関係の資料類に遭遇して、自分の健忘症に苦笑しつつ、それらは「振り返り」の貴重なエビデンスとなった。立つ鳥跡を濁すがごとく、次に研究室を使われる先生のご迷惑を顧みず、私にとっての思い出の品々を研究室に置いたまま、3月末に引越し業者さんに急ぎ立てられるようにして、京大を跡にした。新天地では、静かでのんびりとした時間を持つことを夢見つつ。

「4月1日の入学式、新任式にご出席ください、4月5日には学部教職員歓迎会です。講義は4月8日スタートです」と連絡が来て、すぐに春休みは霞んでしまった。加えて、4月1日に新しい研究室を埋め尽くす堆積された段ボール箱をみて、呆然としてしまった。怒涛の日々は終わっていないと悟った。

しかし、まあ連休に入る頃には研究室に居場所もでき、ネット環境も整い、一息つけるようになった。これから始まる静寂な日々をおおいに期待して、その話はまたの機会にしましょう。



研究会議 昼食(送別)会

教員から

教育学講座
准教授

田中 智子



女の自伝

「いつか本腰を入れよう」と思いつつも、寝かせ続けてxx年のテーマ。本学科の皆さまもお持ちではないでしょうか。

福田(旧姓景山)英子は、そんな「my塩漬けネタ」のひとつである。その才や人格に格別の魅力を感じるわけではないが、自伝『^{わさ}妻の生涯』の面白さは色褪せない。

英子は1885年の大阪事件(朝鮮王宮クーデター未遂)に参加し、一躍「東洋のジャンヌダルク」(実際は「マネージャー≡パシリ」でしかないのです)ともてはやされた。思えば新島八重も「会津のジャンヌダルク」だった……ジャンヌさんは全国にゴマンといたに違いない。女性像のもう一方の極、「ナイチンゲール」も同様だろう(男性は「ロッキー」と「モーツァルト」ですか!?)。

英子の人生は、4人の男性が彩る。自伝では、誰のことだかわれはれの匿名扱いだ。最初は郷里・岡山の小林楠雄(10年上)。若い彼女を民権運動の世界に導いた。上京し、超有名人・大井憲太郎(20年上)に舞い上がる(で、連座入獄)。子まで宿すも、二股・三股の関係、実は

煮え切らないヤツと一気にさめる。決別し、富農の息子、福田友作(同い年)と入籍。いつかアメリカで暮らそうねなどと、生活力・現実味のないヒトだが、平穏な日々を求めてか。なのに、三人の子を遺し梅毒で先立たれた。だが気づけばその後は、書生だった石川三四郎(10年下)が支えてくれた。

この10歳ぎざみの男性遍歴(「お兄ちゃん」→「カリスマ風オトナ」→「友達夫婦」→「年下青年」)の心模様は、よくあるドラマのよう。とはいえ、男装の女学生時代、20代での初潮、同性愛的体験(これは弁解調で、英子ならびに時代の限界を思わせる)……その赤裸々さは、恨みが書かせたとはいえ、今日なお新鮮、真似できない。

金子ふみ子『何がわたしをかうさせたか』の迫力はない。それでも、一人の女性を、肉体とジェンダーとセクシュアリティとアイデンティティの深みから理解させてくれる叙述がちりばめられ、英子さん、隅に置けない。

院生から

生涯教育学講座
博士後期課程2年

花田 史彦



映画評論家からみる日本近代

生涯教育学講座(メディア文化論研究室)博士後期課程2年の花田史彦と申します。私は、日本映画史を研究しています。といっても、作品や監督、俳優について研究しているわけではありません。私が研究対象としているのは、「映画評論家」と呼ばれる人々です。

映画評論家といわれても、ピンとこないかもしれません。たしかに、まだまだ映画史研究の世界でも地味な存在です。ニッチな対象と思われるかもしれません。ただ、私自身は決して奇をてらって映画評論家研究を選んだわけではありません。以下、少し自分の話をします。

私は学部時代、他大学で日本近代史を専攻していました。卒業論文は、『青い山脈』(1949年)という、「戦後民主主義の象徴」として名高い映画作品の受容史研究でした。我々が立脚し、また拘束されてもいる「近代」や「戦後」なる時代に関心があったのです。そして卒論を書く過程で興味湧いてきた対象が、映画作品そのものよりも、それに何らかの「意味」や「価値」を付与する人々、すなわち映画評論家でした。

映画は、20世紀の世界で大きな影響力をもつことが期待されたメディアでした。ときに「革命」のための武器とされ、また「国策」の道具ともなった。あるいは「民主化」の象徴であり、はたまた思想性を脱色された「娯楽」とも言われた。こうした映画への多様な意味づけの一翼を担ったのが映画評論家という存在です。その意味で、彼らの研究をすることは、近代史を考えるうえで重要な意味をもつのです。

そのような問題意識のもと、修士論文では岩崎昶(1903~81年)という、長く日本の映画評論の世界で影響力をもったマルキストの研究を行ないました。彼は映画に「大衆啓蒙」の可能性を見出し、精力的な言論活動を行なった人物です。ただ、もちろん映画評論家とはマルキストだけではありません。現在は岩崎以外の映画評論家にも射程を広げ、研究を行なっています。その作業をとおして、メディア社会としての日本近代像を立体的に浮かび上がらせることに少しでも貢献できればと考えています。

社会人院生 から

教員人生の途上で —もうひとつの最前線—

私は現在、小学校教諭の仕事を休業し、こちらの教育学研究科でお世話になっています。学校現場を離れ、人生二度目となる大学生活は本当に新鮮で、毎日が驚きと知的な発見に満ち溢れ、充実しています。

昨年の3月、勤務している小学校を離れるときに、子どもたちに「先生は大学院に何をしにいくの？」と聞かれたことが思い出されます。もっともらしい返答をしながらも、実際のところは現場を離れることの寂しさや大学院生活への不安がありました。今では大学院での研究の意義が少しずつ見えてきてはいますが、また小学校に復職するときには胸を張って大学院での研究の成果を生かせるように、もっと頑張ろうと自らを鼓舞する日々を過ごしています。

思い返せば、小学校教員としての7年間は子どもたちや同僚の先生や様々な方々に支えられながらの、充実した教員生活でした。子どもの成長を間近で見られることは教師冥利に尽きるものであり、それを励みに仕事に打ち込んできました。しかし同時に、つい目先の授

業のことばかりを考えて、客観的な視点で教育というものを見ていく難しさも感じていました。大学院で教育の本質的な部分を探究する機会を持てたことは、教員人生での大きな飛躍につながると思います。

私は教育方法学講座に所属しており、西岡先生・石井先生にご指導頂きながら、今は修士論文の執筆に邁進しています。国語科を中心とした「音声言語教育」を研究テーマに据え、子どもの学習場面における話すことや聞くこと、話し合うことについて研究しています。偉大な先人の研究に学び、研究室の仲間たちと切磋琢磨しながら、実践との往還を意識しつつ、理論の体系的な研究を進めています。

大学院修了後は理論研究の最前線である大学院と、実践の最前線である学校現場を繋ぐ教員として活躍していけるように、精進していきたいです。

教育方法学講座
修士課程2年(専修コース)

湊本 祐也



留学生から

歴史研究を通して現代社会の理解へ

私は学部生時代に日本語日本文化研修プログラムに参加し、一年間京大の自由な学風の中で、日本文化をたっぷり勉強し体験する機会に恵まれました。京都に身を置くと、思わず歴史に目を向けるようになるのです。その時は近代日本のポスターに描かれる女性像に惹きつかれ、清楚な和装美人や大胆なファッションを着飾る女、これらの表象は一体どのような社会的意味を持っているのかを疑問に思いました。それで、修了論文はポスターの女性表象の変遷と近代日本社会の女性観の変化について分析しました。そして帰国後の卒業論文では、同時期の中国のことも加え、ポスターにおける女性像の中日比較を行ってみました。

資料を読んでいるうちに、近代女性のあり方が一層興味深くなりました。特に私が注目している20世紀初頭というのは、社会の変動によって女性をめぐる環境が著しく変化した時代です。新しい女性規範が形成されつつあり、女性の生き方に関する議論が盛んに行われました。当時の言説をみると、女性の社会進出や家

庭内役割など、まさに現在でも繰り返しが繰り返されているようなものが多くありました。歴史研究を通して、今の自分が置かれている社会への理解が深められるのではないかと考え、留学で知見を深めようと決めました。

今日に至って教育社会学研究室で楽しい研究生活を送れることを非常にありがたく思います。社会学的思考は私にとって新鮮で、自明のものを疑い、再解釈することに楽しさを感じています。現在は、ポスターにおける女性像に注目し続け、「モダンガール」という表象を通して近代中国の女性観を研究しています。当時の女性の眼差しに置かれたモダンガールイメージを明らかにし、近代中国社会における女性の主体性を考察しようと考えています。歴史研究で得た知見が現在における女性の生き方や社会的役割を考える上にも役立つと信じているため、今後も研鑽を積み研究を進めていきたいです。

教育社会学講座
修士課程2年

呉 桐



附属臨床教育実践研究センターから

臨床教育実践研究センターの活動

臨床心理実践学講座教授 臨床教育実践研究センター長 岡野 憲一郎



当センターは、一般市民に開かれた臨床実践としての心理教育相談室での、大学院生や教員による日々の臨床活動をその主たる業務としています。また、学校現場に密着したテーマを現場に還元することを目指し、教師、臨床心理士、精神科医等が交流し思索を深める「リカレント教育講座」、一般市民への教育的啓発を目的とする外国人客員教授による「公開講座」、学校現場での実践を心理・教育的に検討する「現場実践ケースカンファレンス」、東日本大震災被災者に向けた「こころの支援室」の活動、センター関連の研究成果を収めた「京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要」の発刊など、教育・実践・研究活動を進めています。



昨年度のリカレント教育講座（第20回）は2016年8月21日（日）に開催

し、「『心の教育』を考える—発達障害の理解と対応—」をテーマに、シンポジウムや個別事例の検討を行いました。今年度は、「『心の教育』を考える—家族の理解とその支援—」をテーマとして8月20日（日）に開催を予定しています。また11月23日（木・祝）には、クリスティアン・レスラー先生をお迎えし、「ユング心理学と今日の科学的知見—夢、元型、コンプレックス、そして心理療法の効果」と題した公開講座を開催いたします。

東日本大震災に関連して関西に避難、移住して来られている方々への支援を実践しているこころの支援室では、教員、学生が協働し、定期的な支援活動を行っています。2017年2月には「スノードームをつくろう&和(わ)・話(わ)・輪(わ)の会」を院生スタッフ主導のもとに開催し、共通の背景を持つ参加者同士が新たに会ったり、継続して来られている参加者同士が再会し、近況を伝え合ったりする機会とすることができました。震災から6年以上が経過し、それぞれの世帯の状況も個別化してきていますが、参加者のニーズに合わせ、今後もこのような支援活動を継続してまいります。

教育実践コラボレーションセンターより

現場とのコラボを通して

教育方法学講座 准教授 石井 英真



学校教育改善プロジェクトの取り組みの一つである京都市立高倉小学校と京都大学大学院教育学研究科教育方法学研究室との共同研究（プロジェクトTK）も今年で15年目となる。共同研究の主題やグループ編成などは変わっても、「子どもが育つ、教師が育つ、院生が育つ」というコンセプトや、現場に学び現場に寄り添う研究スタンスは基本的には変わらない。私自身、このプロジェクトの立ち上げに関わり、高倉小学校でのフィールドワークを通じて育てていただいた一人である。当時、複数の現場に通い始めていた私は、高倉小にも通い詰め、自転車で行ける距離であったので、多いときには週の半分、しかもそれぞれ一日の半分くらいを高倉小で過ごした。しかも、授業を見るだけでなく、先生方が協働で指導案を検討し授業を創る過程にも参加させていただき、授業づくりにおける目の付け所や頭の働かせ方などを学ばせていただいた。同じ釜の飯を食う関係、授業における共犯関係

であったからこそ、授業を見ても、批評する—される関係ではなく、「あの発問はやはり難しかったかもしれないね」とか、「あのとき〇〇さんはこんなことを書いてましたよ」といった具合に、一緒に明日の授業や目の前の子どものことを考える関係になれたのだと思う。そうした関係性を経験することで、実践を外側から批評する言葉ではなく、現場目線で実戦感覚に合う「落ちる」言葉を生み出すことも少しはできるようになったのではないと思う。現場に関わる研究者は、医者にたとえるなら、専門医と町医者の二足のわらじを履くことが大事だと考えている。現場に棲み込み、その文化にどっぷりつかりながらも、現場にとってどこまでいっても異界の他者でなければならない。そんな現場とコラボすることの難しさとおもしろさを、自分の後輩にあたる今の院生たちにも経験してほしいと願っている。

国際共同シンポジウム 「The Future of the Study of Education —教育研究の新たな展開—」を開催しました。



京都大学・北京師範大学・ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン(UCL)教育研究所 国際共同シンポジウム「The Future of the Study of Education—教育研究の新たな展開—」を平成28年12月9日に時計台記念館にて開催しました。本シンポジウムは、本研究科がこれまで国際共同研究や大学院生交換プログラムを進めてきた英国のUCL教育研究所と中国の北京師範大学教育学部と共同で開催したもので、当該大学の研究者や学生に加えて全国から教育関係者など約80名が参加しました。南部広孝准教授(現教授)の総司会のもとで、通訳は野口由紀子氏が務め、本研究科Jeremy Rapple(ジェレミー・ラプリー)准教授が補佐を務めました。



講演する朱教授

シンポジウムでは、本研究科の稲垣恭子前副研究科長(現研究科長)の挨拶に続き、まず北京師範大学教育学部長の朱旭東(Zhu Xudong)教授が“Knowledge Graphs of Educational Research on China, America and Japan from Chinese Scholars' Perspectives”(中国における日中米教育研究の知的広がり)と題する講演を行い、中国において3か国を対象とした教育研究のテーマや研究者がどのように分布しているのかを実証的に示したうえで、政策形成の過程でこうした研究が重視されるようになっており、教育研究の拠点がシンクタンクとして機能しつつあることが紹介されました。続いて、UCL教育研究所教育哲学センター長Paul Standish(ポール・スタンディッシュ)教授が“Science, Humanities and the Rise of Neuroscience”(科学、人文学と、神経科学の台頭)と題する講演を行い、ルネサンス絵画を例に、パースペクティブ(視点)の問題との関わりから科学と人文学の二つの文化を再考しました。そして、急成長を遂げる神経科学研究に対して人文学のもつ妥当性を、脳についての的確な理解には心が作用するホーリスティックな文脈理解が必要であるという観点から例証しました。続いて、本研究科 齋藤直子准教授が“Towards an Economy of Beautiful Knowledge”(美しい知識のエコノミーに向けて)と題する講演を行い、「役に立つ知識とは何か」という観点から、人文学の危機の時代におけるアメリカ実践哲学の意義を論じ、「優秀な羊」から「野生のマガモ」の教育への転換を提言しました。



講演するStandish教授



講演する齋藤准教授

最後に、本研究科研究科長 高見茂教授(現名誉教授)より「教育学研究科の展望と将来像」(The Future of the Graduate School of Education)と題し、上記の講演内容を踏まえて、本研究科の多様な研究分野におけるAI研究への応用を一例として紹介しながら、AIを教育するという斬新な観点から今後の本研究科の将来像を提示しました。



報告する高見前研究科長

記念講演の質疑応答では、教育研究の政策形成への貢献のあり方や、人文学が価値や正当化の問題を考慮する上で特権的な地位をもつという科学と人文学の二つの文化の非対照的な関係性、科学と人文学の双方において教育・研究を維持するための資金の本質的な重要性、またこれに基づく学際的な研究と探究の可能性などが討議され、講演者と聴衆がシンポジウム終了後や懇親会でも熱心に議論を続けました。

本シンポジウムでは、国際的で学際的な討議を通じて、人文学と科学の際に立つ教育研究の意義が改めて問い直されました。それを通じて世界各国における教育情勢の変化を背景にした教育学研究科の今後の構想と、教育研究の新たな展開についての理解を深めることができました。また、今回の国際交流企画では、北京師範大学教育学部とは双方の大学院生が主体的に企画・運営し、共通テーマを発表して議論を深める研究交流会を実施しました。また、UCL教育研究所とは「国際教育研究フロンティアC」を外国の大学院との共同授業という形で開講し、スタンディッシュ教授の英国式ゼミにおいて、同研究所の博士課程学生5名と本学部・研究科の学部生・大学院生が活発に英語で議論し学習する様子がOCWで世界配信されます。これらの諸企画を通じ、異文化間の国際交流に教員と大学院生が共に学習しながら参与する、教育学研究科ならではの国際共同教育プログラムの場が創出され、今後、3大学における更なる連携発展につながる成果が生み出されるにいたりました。

グローバル教育展開オフィスの設置について

本研究科では、平成30年度に組織再編を行い、融合型組織へ転換することで、新時代の教育課題に対応する「学際教育学研究拠点」を形成し、その成果を次世代の教育研究・教育実践を担う人材の育成へと繋ぐ研究・教育体制を整備することとしています。

これに伴い、本研究科で行ってきた教育研究の研究成果と、より高度な教育プログラムを通じた人材養成へと連結し機能させていくためのリエゾンオフィスとして、「グローバル教育展開オフィス」を設置しました。

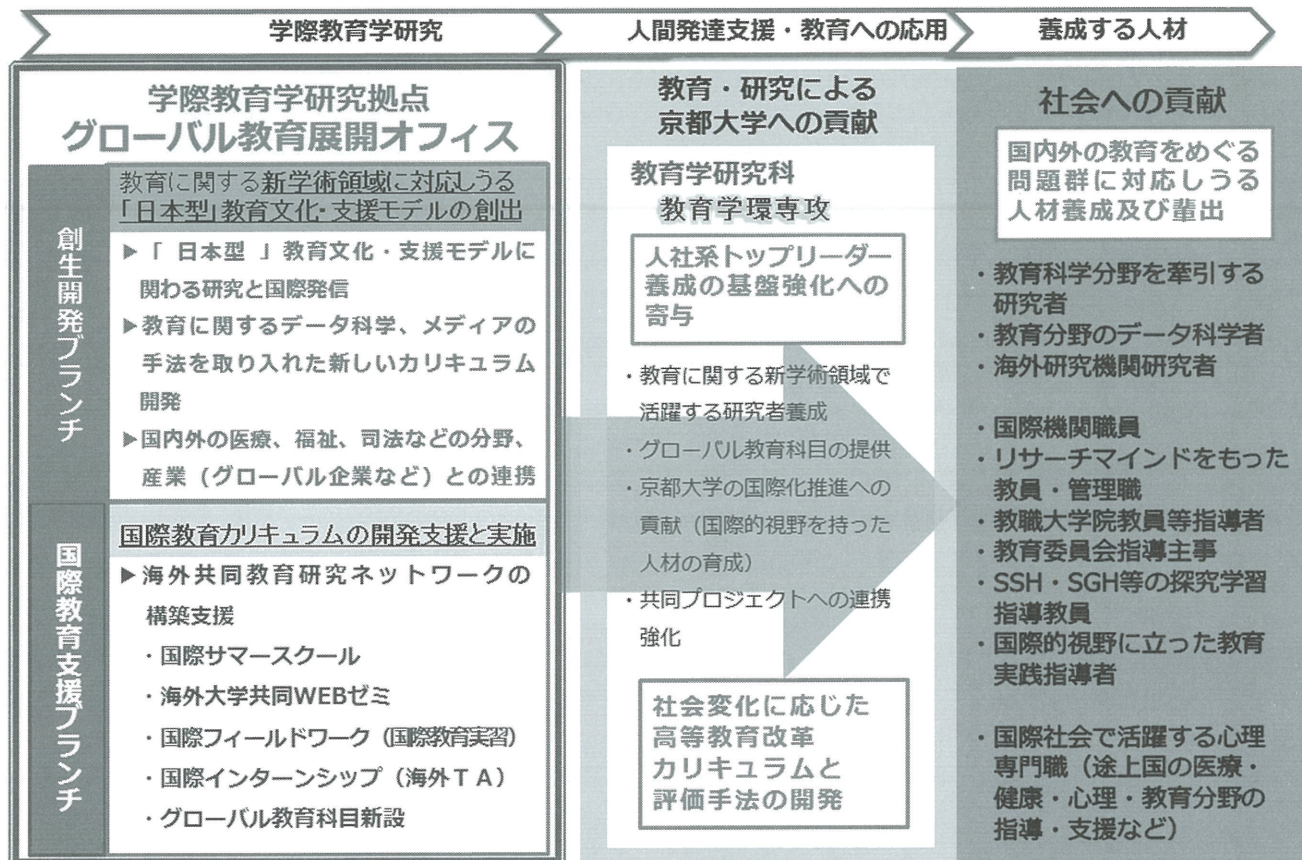
オフィスには、新学術領域の開発や共同プロジェクトの推進を担う「創生開発ブランチ」と、国際教育カリキュラムの開発と実施を担う「国際教育支援ブランチ」の二つを置き、グローバルな視野にたった先端的研究と国際的に活躍できる教育人材の養成を支援します。

平成29年度については、研究科長の下、本研究科教員と事務スタッフ1名でスタートし、今後は専任教員の配置を行い、さらに実質的な支援体制と運営体制を構築する予定です。

ご活用・ご支援のほど、よろしくお願いいたします。



融合型組織への転換に伴う往還型教育・研究の展開



若手研究者出版助成事業

教育学研究科では、京都大学総長裁量経費を得て、優秀な若手研究者による博士論文の出版助成事業を行っております。本制度を利用して昨年度は7件採択されましたので、ご紹介します。

氏名	修了年月日・現職	タイトル	出版社
鄭 谷心	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成27年9月修了 東京学芸大学次世代教育研究推進機構 助教	近代中国における国語教育改革 —激動の時代に形成された資質・能力とは—	日本標準
野崎 優樹	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成28年3月修了 京都大学大学院教育学研究科・デザイン学大学院 連携プログラム 特定講師	情動コンピテンスの成長と対人機能 —社会的認知理論からのアプローチ—	ナカニシヤ出版
竹腰 千絵	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成25年3月修了 沖縄カトリック中学高等学校 教員	チュートリアルスの伝播と変容 —イギリスからオーストラリアの大学へ—	東信堂
小山内 秀和	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成26年3月修了	物語に入り込む： 読書と没入体験の心理学	京都大学学術出版会
広瀬 悠三	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成25年9月研究指導認定退学 奈良教育大学教育学部 特任准教授	カントの世界市民的地理教育 —人間形成論的意義の解明—	ミネルヴァ書房
三野 和恵	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成28年3月修了 日本学術振興会 海外特別研究員	文脈化するキリスト教の軌跡 —イギリス人宣教師と日本植民地下の台湾基督長老教会	新教出版社
中藤 信哉	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成25年3月修了 京都大学学生総合支援センターカウンセリングルーム 特定助教	心理臨床と「居場所」	創元社



『近代中国における国語教育改革—激動の時代に形成された資質・能力とは—』

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程平成27年9月修了 東京学芸大学次世代教育研究推進機構 助教

鄭 谷心

国語力とは何でしょうか。なぜ、それが重要なのでしょうか。近代中国において、それをどのように認識され、構成されていったのでしょうか。本書は、これらの質問を回答すべく、1920年代前後から30年代末までの数十年間において、中国における国語教育改革の様々な進歩的な取り組みに焦点をあてて、現代のグローバル社会における資質・能力論の源流を探っていきます。また、そのような激動の時代において求められる国語力の内実と指導・評価を検討するなかで、日本で求められている国語力に関する重要な論点を相対化するとともに、学校における読解力や文章表現力の向上をめざす方法論上の解決策を考えるための一助となりますことを願っております。

日本標準



『情動コンピテンスの成長と対人機能—社会的認知理論からのアプローチ—』

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程平成28年3月修了 京都大学大学院教育学研究科・デザイン学大学院連携プログラム 特定講師

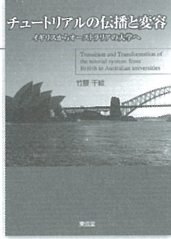
野崎 優樹

おそらく大多数の人が、自分あるいは周囲の人の情動に上手く対処できず、失敗してしまった経験があると思います。そのため、自分や他者の情動に上手く対処できるようになりたいと思っている人も多いのではないのでしょうか。この能力は、心理学研究では、「情動コンピテンス」と呼ばれており、社会で上手くやっていく上で重要な役割を果たす能力として、近年注目が集められています。

本書は筆者が平成27年度に提出した博士論文をベースに執筆したものであり、情動コンピテンスの測定・成長・機能を検討した研究を収録しました。情動コンピテンスに対しては、構成概念の線引きをどこで引くのか、背後にあるメカニズムのモデル化など、研究の最前線では多くの問題が指摘されています。本書では、実証的な知見に基づき、理論的な考察を行うことで、これらの問題に対する解決策を提案しています。情動コンピテンスをはじめとする社会情緒的能力に関心を持つ多くの方々を目に止まり、今後の理論と実践の発展につながれば幸いです。

ナカニシヤ出版

若手研究者出版助成事業



『チュートリアル of 伝播と変容—イギリスからオーストラリアの大学へ—』

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成25年3月修了 沖縄カトリック中学高等学校 教員

竹腰 千絵

イギリス高等教育において伝統的な教授形態であるチュートリアル。チュートリアルとは、少人数の環境下で、学生が書いてきたエッセイをもとに、学生とチューターがディスカッションをし、その中で学生の思考が深められていくという学びのスタイルである。学生主体、少人数制などの形態の特徴は、昨今の日本の教育現場におけるアクティブラーニングとも通底している。

チュートリアルは、その起源であるオックスブリッジから、イギリス国内の大学へ、そして植民地下にあったオーストラリアの大学へと伝播していった。現代のオーストラリア高等教育においては、オックスブリッジに比べ規模の大きい学生集団に対してチュートリアルが行われているが、そこではウェブ等を巧みに活用し、変容した形のチュートリアルが模索されている。その変容プロセスから、形態の特徴のみならず、その機能的特徴を抽出し、チュートリアルの本質を描き出したのが本書である。

助成をいただいて出版した本書が、これからの学生主体の学びを考える契機になることを願っている。

東信堂



『カントの世界市民的地理教育—人間形成論的意義の解明—』

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成25年9月研究指導認定退学 奈良教育大学教育学部 特任准教授

広瀬 悠三

家庭や国家のための教育、という限定を超えて構想される世界市民的教育が注目を集めている。そのような教育は、自然環境問題や戦争・テロといった国境を超えた課題に対処するだけでなく、人間が内的に限定されない形成的発展を行っていることにも対応している。この世界市民的教育を現実的に推進するには、どのような教育を考える必要があるだろうか。世界市民的教育の提唱者である近代ドイツの哲学者・カントは、従来目を向けられていなかった地理教育を世界市民的教育の基盤に据えている。

カントの地理教育とは、自然地理学と人文地理学をともに含み込み、大地に存在する細分化可能なあらゆるものを有機的に扱うことができる希有な取り組みである。この地理的な営みを通して、子どもたちの感性や悟性、また理性といった心的能力は連関して形成され、子どもたちは、独断論的でも懐疑論的でもなく、批判的に思考するようになる。批判的思考力は、カントの批判哲学の要であり、こうして自らを中心にして思考するエゴイズムを脱して複数主義的に思考し行為することができるようになる。世界市民とは、絶え間なく無数の視点から複数主義的に事物を考え行為することができる存在であり、このような意味において地理教育は世界市民的教育の要となるのである。

ミネルヴァ書房



『文脈化するキリスト教の軌跡—イギリス人宣教師と日本植民地下の台湾基督長老教会—』

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成28年3月修了 日本学術振興会 海外特別研究員

三野 和恵

本書は、イングランド長老教会が日本植民地支配下の台湾に派遣した宣教師キャンベル・N・ムーディ(1865-1940)の宣教事業、及び台湾基督長老教会信徒・聖職者のキリスト教論の変遷を、両者の相互関係に着目しながら検討するものである。ムーディら宣教師の英文資料に加え、台湾人キリスト者が書き残した白話字(閩南系台湾語のローマ字表記)及び漢文の資料を検討し、両者が相互の緊張・触発関係を通して織り成した歴史-日本植民地下台湾に文脈化するキリスト教の軌跡-を多角的に再構成した。このことで、本書はムーディ及び台湾人キリスト者が、キリスト教のメッセージ(テキスト)を軸に、台湾人の植民地支配民としての人格的・身体的「苦しみ」を含む歴史的文脈(コンテキスト)を問うと同時に、このコンテキストに根付きつつキリスト教のテキストの意味を捉え返すという神学的格闘にも取り組んでいたこと、こうした思想的作業こそが、台湾人の人格的尊厳を実現し得るものとしての台湾人の自治的空間や倫理的社会の構想にもつながったことを明らかにした。

新教出版社



『心理臨床と「居場所」』

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成25年3月修了 京都大学学生総合支援センターカウンセリングルーム 特定助教

中藤 信哉

「居場所」という言葉は日常語である一方で、今日、心理臨床をはじめ多様な領域において重要な概念となっています。クライエントが自らの心的苦痛を「居場所がない」と語る場合もあれば、心理療法や心理的援助を「居場所」のメタファーを用いて捉える場合もあります。しかしながら、その意味は、実のところ曖昧で多義的です。「居場所がない」という状態や心的苦痛をいかに理解すればよいのか、そしてどのように支援すればよいのかは、決して自明ではありません。

本書はこうした「居場所」という概念について検討したものです。概念の形成過程について歴史的・文化的に検討すると同時に、主体や身体、アイデンティティとの関連を論じています。更に、「居場所のなさ」が生じるプロセスについて実証的にアプローチし、また心理療法における「居場所」の諸相についても考察することを通して、心理臨床実践に寄与することを試みています。本書が、心理臨床に携わる方や、広く「居場所」に関心がある方に、わずかでも新しい視点を提供できれば幸いです。

創元社

おもな出来事(2016.11.1~2017.3.31)

11月

6日(日) 教育実践コラボレーション・センター
E.FORUMジョイントセミナー
「学習指導要領改訂期の課題と展望～パフォーマンス評価の可能性～」
東京学芸大学教職大学院棟

12月

9日(金) **国際共同シンポジウム**
「The Future of the Study of Education—教育研究の新たな展開—」
百周年時計台記念館

21日(水) **Bipin Indurkha教授講演会「子どものように考える：
創造性を刺激する知覚的類似性の役割」**
教育学部本館

23日(金) 「出張・瀬戸内海的环境を考える高校生フォーラム」
人間・環境学研究科棟

1月

24日(火) **Cansin Özgör氏講演会**
教育学部本館

2月

1日(水) 教育実践コラボレーション・センター
第20回知的コラボの会
「What is the use of an American scholar in the Japanese academy?
Reflections on Four Stages in An Evolving Research Career」
教育学部本館

5日(日) こころの支援室
「スノードームをつくろう!&和・話・輪の会」
総合研究1号館

15日(水) **ミニ・シンポジウム「科学と健康に関する情報に対する批判的思考と評価」**
教育学部本館

18日(土) 教育実践コラボレーション・センター
「2017野童いなか塾(第13回)減災懇話会～水害に備える～」
野殿・童仙房生涯学習センター(旧小学校)

18日(土)、19日(日) **歴史人類学国際会議**
「もう一つの知—現代における身体知・暗黙知・実践知の可能性」
教育学部本館

3月

6日(月) **ミニ・シンポジウム「勤労青年文化のメディアと教育/教養をめぐって」**
教育学部本館

25日(土) 教育実践コラボレーション・センター
E.FORUM全国スクールリーダー育成研修「第12回実践交流会」
吉田南総合館

27日(月) **ミニ・シンポジウム「広報と公共性における戦前/戦後の連続と断絶」**
教育学部本館

諸記録

平成29年度入試結果

◎教育学部

日程等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
前期日程	文系	44	192	150	44	55
	理系	10	48	39	11	
特色入試		6	21	21	6	6
学士入学		10	22(1)	22(1)	6(1)	6(1)

※特色入試において最終的な入学手続者数が募集人員に満たなかった場合は、残余の募集人員を前期日程(文系)の募集人員に加えます。()内の数は外国人留学生で内数

◎教育学研究科

課程等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	
修士課程	研究者養成コース	教育科学専攻	18	36(12)	35(12)	20(7)	20(7)
		臨床教育学専攻	14	34(1)	33	12	12
	教育科学専攻(専修コース)		10	13	13	8	8
	臨床教育学専攻(第2種)		若干名	1	1	1	1
博士後期課程臨床教育学専攻(臨床実践指導者養成コース)		4	5	5	3	3	
博士後期課程編入学	教育科学専攻	若干名	6	6	2	2	
	臨床教育学専攻		7	7	0	0	

()内の数は外国人留学生で内数

平成28年度学位授与件数

学位名等		授与者数
学士	教育科学科	73
	教育科学専攻	30
修士	臨床教育学専攻	13
	課程博士	14
博士	論文博士	1

平成28年度教育職員免許状取得状況

中学校専修免許状	2
中学校1種免許状	2
高等学校専修免許状	4
高等学校1種免許状	4
特別支援学校1種免許状	1

外部資金受入れ(H29年度)

◎共同研究

研究題目	委託者	担当者
建築空間デザインがインタラクションに及ぼす影響の研究	株式会社竹中工務店	楠見 孝
料理画像とレシピテキストとの対応付けに関する研究	クックパッド株式会社	橋本 敦史
筆圧とストレスに関する研究	株式会社ワコム	野村 理朗
こころの豊かさに関する総合的研究	(非公開)	桑原 知子

◎受託研究

研究題目	委託者	担当者
「活力ある生涯のためのLast5Xイノベーション」拠点 妊産婦・母子サポート・あかちゃんとお母さんに対する育児サポート	国立研究開発法人科学技術振興機構	明和 政子

◎寄付金

研究題目	寄附者	担当者
発達障害を持つ成人の併存障害を予防するための国際共同研究	公益財団法人ファイザーヘルスリサーチ振興財団	米田 英嗣
母親の身体感覚の個人差が乳児の感情理解に与える影響	一般財団法人前川財団	明和 政子
身体接触を伴う母子間相互作用が乳児の感情表出に与える影響	一般財団法人前川財団	明和 政子
幼児の主体的な意思決定がトイレトレーニングに与える影響	一般財団法人前川財団	明和 政子
連続テレビ小説における女性の表象と受容に関する文化社会学的研究	公益財団法人放送文化基金	稲垣 恭子
高次元空間での外れ値検出と教師なし分類によるワードグラウンディング技術の研究	公益財団法人立石化学技術振興財団	橋本 敦史

科学研究費補助金(平成29年度)

事業名	研究課題名	氏名
新学術領域研究(研究領域提案型)	物語における時間認識の身体・神経基盤	米田 英嗣
新学術領域研究(研究領域提案型)	オープン・データを活用した思春期・青年期・成人期早期における主体価値の諸相の解明	高橋 雄介
基盤研究(A)	学校を中心とする教育空間における力動的秩序形成をめぐる多次元的研究	桑原 知子
基盤研究(A)	Understanding, measuring, and promoting crucial 21st century skills: Global communication, deep learning, and critical thinking competencies	Manalo Emmanuel
基盤研究(A)	身体的表象から自他分離表象にいたる発達プロセスの解明	明和 政子
基盤研究(B)	パフォーマンス評価を活かした教師の力量向上プログラムの開発	西岡 加名恵
基盤研究(B)	戦後東アジア諸地域における教育の比較史的分析—冷戦と植民地主義に着目して—	駒込 武
基盤研究(B)	21世紀型コンピテンシー育成のためのカリキュラムと評価の開発	矢野 智司
基盤研究(B)	「メディア出身議員」調査による新しいメディア政治史の構想	佐藤 卓己
基盤研究(B)	東アジアにおける教育過剰と就業行動・意識との関係に関する比較研究	岩井 一郎
基盤研究(B)	なつかしさ感情の機能と個人差:認知・神経基盤の解明と応用	楠見 孝
基盤研究(B)	戦後日本における政治家・財界人の教育観に関する教育社会学的研究	稲垣 恭子
基盤研究(B)	後発国における大学院教育及び学位制度の導入と変容に関する比較研究	南部 広孝
基盤研究(C)	<レジリエントな個>の育成とアメリカ実践哲学:哲学と教育のクロスカレント研究	齋藤 直子
基盤研究(C)	共感の個人差を形成する文化・心理・生物学的要因に関する認知科学的研究	野村 理朗
基盤研究(C)	公立図書館という空間に関する歴史横断的研究	川崎 良孝
基盤研究(C)	ケアとスピリチュアリティの教育人間学的解明-女性宗教者への聞き取り調査を中心に	西平 直
基盤研究(C)	学習アーキテクチャとしての「記憶空間」の形成原理および問題改善の研究	山名 淳
基盤研究(C)	トランスナショナル高等教育と多国籍大学の展開に関する国際比較研究	杉本 均
基盤研究(C)	音韻的作動記憶における系列情報保持を支える時間構造の長期知識	齊藤 智
基盤研究(C)	資質・能力を育てる授業デザインと教師の力量形成に関する開発研究	石井 英真
基盤研究(C)	心理アセスメントにおけるスーパーヴィジョンシステムの構築	高橋 靖恵
基盤研究(C)	<哲学の女性性>とアメリカ哲学のグローバルな再生:政治教育の実践哲学研究	齋藤 直子
基盤研究(C)	教師力(タクト)熟達の日独比較—学校日常の緊急性・不確実性対処に関する実証研究	鈴木 晶子
基盤研究(C)	森有礼文部大臣時代の教育政策に関する総合的研究—「森文政」期像の再構築—	田中 智子
基盤研究(C)	「立ち直り」概念の理論的検討をふまえた非行少年の社会復帰プロセスに関する研究	岡邊 健
若手研究(A)	遺伝子多型と社会環境の相互作用が子どもの実行機能の発達とその脳内機構に及ぼす影響	森口 佑介
若手研究(B)	ナショナリズムと「文明的」自己像形成をめぐる現象の比較・歴史社会学的考察	竹内 里欧
若手研究(B)	小学校外国語活動において言語への関心を高めるための多言語カードの開発と効果の検証	黒田 真由美
若手研究(B)	物体操作を介した心的状態の推定	橋本 敦史
若手研究(B)	文章の読み過程の包括的検討と読み支援手法の開発	田中 哲平
若手研究(B)	近世教育メディア史における「無料」の価値—「施印」に着目して	ファンステーンパール ニールス
若手研究(B)	Is An Alternative Concept of Learning Driving East Asian Academic Achievement? Comparisons of PISA Performance with Implications for Policy Reforms	Rappleye Jeremy
挑戦的萌芽研究	「夢の構造分析」に関する発達の・比較文化的・心理臨床的研究	田中 康裕
挑戦的萌芽研究	学校改善に向けた「往還型」質的測定手法の開発的研究	服部 憲児
挑戦的萌芽研究	文化装置としての「師弟関係」に関する歴史社会学的研究	稲垣 恭子
挑戦的萌芽研究	誤報記事と新聞批判のメディア史的研究	佐藤 卓己
挑戦的萌芽研究	評定尺度法に対する回答の個人差と集団差を同時補正するための新たな方法の開発と評価	高橋 雄介
研究活動スタート支援	インドにおける大学入学者選抜制度の研究—全国統一型試験の動向に着目して	渡辺 雅幸

厚生労働科学研究費補助金(平成29年度)

研究課題名	氏名
HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究	大山 泰宏

諸記録

人事異動(H28.11.1-H29.4.30)

平成28年11月1日付け

技術補佐員(教育方法学) 採用

平成28年12月31日付け

日吉 和子 特定助教(教育方法学) 退職
技術補佐員(教育方法学) 退職

平成29年2月1日

MUNAKATA, Yuko 招へい外国人学者 受入

平成29年2月16日

野崎 優樹 特定講師(教育認知心理学(デザイン学)) 採用

平成29年2月28日付け

市川 千秋 研究員(地域連携教育研究推進ユニット)任期满了

平成29年3月31日付け

高見 茂 教授(比較教育政策学) 定年退職
田中 耕治 教授(教育方法学) 定年退職
渡邊 洋子 准教授(生涯教育学) 退職
大山 泰宏 准教授(心理臨床学) 退職
田中 友香理 助教(教育方法学) 退職
渡邊 雅幸 助教(国際関連) 退職
中島 悠介 特定助教(地域連携教育研究推進ユニット) 退職
今福 理博 特定助教(教育方法学) 任期满了
柴 恭史 特定講師(地域連携教育研究推進ユニット) 任期满了
時岡 良太 特定助教(附属臨床教育実践研究センター) 任期满了
皆本 麻実 特定研究員(心理臨床学) 任期满了
内海 健太 研究員(教育認知心理学) 任期满了
佐伯 恵里奈 研究員(教育認知心理学) 任期满了
Chalandon Emilia 研究員(心理臨床学) 任期满了
BUTLER, David 外国人共同研究者(外国人特別研究員) 終了
ZHU, Ling 招へい外国人学者 終了
事務補佐員(比較教育政策学) 任期满了
事務補佐員(臨床教育実践研究センター) 任期满了
事務補佐員(比較教育政策学) 任期满了
事務補佐員(生涯教育学) 任期满了
吉田 千里 研究員(教育方法学) 任期满了
技術補佐員(教育方法学) 任期满了
教務補佐員(教育認知心理学) 任期满了
労務補佐員(総務掛) 任期满了
派遣職員(教育認知心理学) 任期满了
派遣職員(臨床教育学) 任期满了
派遣職員(図書掛) 任期满了

平成29年4月1日付け

稲垣 恭子 教授 研究科長・学部長(任期29.4.1-31.3.31)
楠見 孝 教授 副研究科長(任期29.4.1-31.3.31)
矢野 智司 教授 副研究科長(任期29.4.1-31.3.31)
岡野 憲一郎 教授 附属臨床教育実践研究センター長
(任期29.4.1-31.3.31)
西平 直 教授 現代教育基礎学系長(任期29.4.1-30.3.31)
皆藤 章 教授 教育心理学系長(任期29.4.1-30.3.31)
佐藤 卓己 教授 相関教育システム論系長(任期29.4.1-30.3.31)
齋藤 直子 准教授 国際高等教育院へ配置換
(大学院教育学研究科併任)
明和 政子 教授 国際高等教育院より配置換
南部 広孝 教授(比較教育政策学) 昇任
西岡 加名恵 教授(教育方法学) 昇任
岡邊 健 准教授(教育社会学) 採用
渡邊 雅幸 特定講師(地域連携教育研究推進ユニット) 採用
朱 燁 助教(臨床教育学) 採用
種村 文孝 助教(生涯教育学) 採用
郭 曉博 特定助教(地域連携教育研究推進ユニット) 採用
田附 紘平 特定助教(心理臨床学) 採用
千葉 友里香 特定助教(臨床心理実践学) 採用
BUTLER, David 特定助教(教育方法学) 採用
皆本 麻実 特定助教(心理臨床学) 採用
古屋 比奈 掛長(総務掛)
南西地区共通事務部総務課掛長(iPS細胞研究所総務掛)へ配置換
韮 尚子 掛長(総務掛)
北部構内総務課掛長(農学研究科等総務掛)より配置換
大山 泰宏 研究員(心理臨床学) 採用
事務補佐員(教育方法学) 採用
事務補佐員(グローバル教育展開オフィス) 採用
技術補佐員(教育方法学) 採用
教務補佐員(教育認知心理学) 採用
教務補佐員(教育認知心理学) 採用
派遣職員(総務掛) 採用
派遣職員(図書掛) 採用
派遣職員(教務掛) 採用

平成29年4月11日付け

派遣職員(情報関連) 採用

教員寄贈図書

寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
楠見 孝	教育学研究科開設科日授業成果報告書： 京都大学デザイン学大学院連携プログラム 平成27年度	子安増生	2016
駒込 武	殖民地帝國日本の文化統合	國立臺灣大學出版中心	2017
子安 増生	教育認知心理学の展望 = Perspective of cognitive psychology in education	ナカニシヤ出版	2016
子安 増生	心の理論：第2世代の研究へ	新曜社	2016
子安 増生	「心の理論」から学ぶ発達的基础：教育・保育・自閉症理解への道	ミネルヴァ書房	2016
子安 増生	子安増生教授履歴・業績目録	子安増生	2016
子安 増生	Frontiers in developmental psychology research： Japanese perspectives	Hituzi Syobo	2016
佐藤 卓己	青年の主張：まなざしのメディア史	河出書房新社	2017
高橋 靖恵	「臨床のこころ」を学ぶ心理アセスメントの実際： クライアント理解と支援のために	金子書房	2014
高橋 靖恵	家族のライフサイクルと心理臨床	金子書房	2008
田中 耕治	Curriculum, instruction and assessment in Japan： beyond lesson study	Routledge	2017
田中 耕治	思考力・判断力・表現力育成のための長期的ルーブリックの開発 (平成25～27年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果最終報告書)	田中耕治	2016
西岡 加名恵	資質・能力を育てるパフォーマンス評価： アクティブ・ラーニングをどう充実させるか	明治図書出版	2016
福井 佑介	図書館の倫理的価値「知る自由」の歴史的展開	松籟社	2015
溝上 慎一	アクティブラーニング・シリーズ (全7冊)	東信堂	2016
溝上 慎一	大学のアクティブラーニング：導入からカリキュラムマネジメントへ	東信堂	2016
渡邊 洋子	日英の女性医療専門職の生涯キャリアと養成・支援に関する総合的研究 (平成25～27年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書)	「日英の女性医療専門職の生涯キャリアと 養成・支援に関する総合的研究」 科研報告書編集委員会	2016

受入期間：2016/4/1～2017/3/31 寄贈者氏名順(敬称略)

教育学研究科・教育学部図書室にいただいた寄贈者著作のみの掲載です。今後とも蔵書充実のためにご寄贈くださいますようお願いいたします。

教育学研究科・教育学部基金

ご寄付いただきました方々への感謝の意を含め、ここに芳名を掲載させていただきます。(公開をご希望されない方については、掲載しておりません。)

相川 陽子	北森 邦幸
浅野 佐保子	楠見 孝
飯塚 駿一	高 為重
生川 利明	齋藤 堯仁
石村 規子	高木 枝美子
一澤 源三	高橋 登
伊東 大介	辻村 政雄
伊藤 大介	手嶋 康
伊藤 良子	長谷川 保宏
葛尾 創	松本 嘉一
金山 靖道	室田 美佳
蒲池 俊和・理恵	山田 真理子
河合 均	

(五十音順)

平成29年5月31日現在

ー未来の教育を創造するため、人間・社会についての世界最先端の研究を展開し、成果の社会還元を行うとともに、学生の教育環境の整備に取り組みますー

本研究科・学部は、1949年の創設以来、世界最先端の教育学研究とその研究者の養成、ならびに全学の教職教育の責任部局という責務を担いながら、これまで各界で活躍する有為な人材を輩出し、優れた研究成果を現場に還元することで社会の要請に応えてきました。

本研究科・学部は、学校教育はもとより、地域、家庭、職場など人が育っていくあらゆる場を「人間形成」の場として探究しています。その中で、不登校・学習意欲不振生徒のための学校改善、過疎地域の地域振興などへの提言、教育委員会の指導主事など第一線の実践現場で働く人びとにとっての研修の機会を提供しておりますが、このような活動は、大学院生が現場のリアルな問題に触れながら自らの研究関心と手法を研ぎすますための教育の場でもあります。

近年、社会と連携したこうした教育研究活動の必要性が増す状況において、本研究科・学部が社会と連携しながら実践的な教育・研究を行うためには、安定した財政基盤が必要です。その礎の一つとして、2015年に「教育学研究科・教育学部基金」を設立しました。本基金では、研究の成果

を現場(フィールド)に返し、また現場での課題を教育・研究に生かしていく、「理論と実践の往還型」の教育・研究という本研究科・学部の特色ある活動を維持するため、以下の活動に活用します。

基金の使途：

項目	具体例
(1) 教育支援	・学生のための図書・教材等の購入 ・学生関係居室の整備・維持管理 ・障害学生等のための学習補助者の雇用 ・学生・院生の海外派遣 など
(2) 研究支援	・研究活動基盤整備の支援 ・研究・学術資料の整備 ・公開講座・講演会等の開催 など
(3) その他事業支援	・京都大学教育学研究科シリーズ本の出版補助 ・修了生・卒業生との連携活動 など

詳細は以下のとおり

<http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/contribution/education/index.html>

新任教員・事務職員紹介



野崎 優樹
特定講師

2月に着任いたしました。新たな気持ちで教育・研究活動に励みたいと思います。これからよろしくお願いたします。

所 属 教育認知心理学講座
専 門 教育心理学, 社会心理学



岡邊 健
准教授

主な研究テーマは犯罪・少年非行です。日本では研究者が少ない領域ですが、多くの方にその面白さを伝えていければと思います。

所 属 教育社会学講座
専 門 逸脱研究・犯罪社会学



種村 文孝
助教

法律専門職と市民の関係性に注目し、現代社会の法曹養成や市民の法教育について研究しています。よろしくお願いたします。

所 属 生涯教育学講座
専 門 社会教育学, 生涯学習



朱 燁
助教

日常言語哲学の観点から人間の生とその条件と言語の関係について考える。

所 属 臨床教育学講座
専 門 言語哲学



田附 紘平
特定助教

4月に着任いたしました。様々な形で皆さまのお役に立てるように精一杯頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願いたします。

所 属 心理臨床学講座
専 門 心理臨床学



千葉 友里香
特定助教

4月に着任いたしました。これまで教育学研究科で学んできたことをもとに、教育、研究に精一杯取り組んでいきたいと思っています。

所 属 附属臨床教育実践研究センター
専 門 心理臨床学



BUTLER, David
特定助教

心がどのように発展し、進化したかを研究しています。

所 属 教育方法学講座
専 門 偏見認知, 神経科学(視線・脳波), 比較認知科学



皆本 麻実
特定助教

昨年度は特定研究員としてお世話になりました。今年度より特定助教となり、教育にも携われることを嬉しく思っております。

所 属 心理臨床学講座
専 門 臨床心理学

靱 尚子 掛長

4月から総務掛で勤務させていただいております。教育学研究科のサポートをすべく尽力いたしますので、よろしくお願いたします。

所属掛 総務掛

派遣職員

4月から教務掛でお世話になっております。精いっぱい努めます。よろしくお願いたします。特技はどこでもブチ英語です。

所属掛 教務掛

派遣職員

4月から図書掛でお世話になっております。皆様のお役に立てるよう努力しますのでどうぞよろしくお願いたします。

所属掛 図書掛

編集後記



これまで何度か検討されてきたニュース・レターのデジタル化案は、広報委員会でも慎重に議論されましたが、今回も見送りとなりました。プル型メディアであるインターネットがもたらした選択的な情報環境に加えて、SNSで似たもの同士の情報接触が強化されたため、人々が一般的に共有する情報の比率はますます少なくなっているとも言われます。教育学部・研究科という小さな組織であっても、なおプッシュ型の紙媒体は不可欠という判断です。もちろん、同窓会をふくめた電子的な情報共有システムの構築も今後の課題として残ります。電子化の是非を含め、本誌の編集方針などについて積極的に御意見を寄せいただければ幸いです。(S)

京都大学教育学研究科・教育学部広報委員会

- 委員長 桑原 知子 教授 (心理臨床学講座)
- 委員 稲垣 恭子 教授 (教育学研究科長・教育学部長)
- 委員 佐藤 卓己 教授 (生涯教育学講座)
- 委員 VAN STEENPAAL, Niels 准教授 (教育学講座)
- 委員 眞継 芳春 事務長
- 委員 靱 尚子 総務掛長
- 委員 辻 幸代 教務掛長

事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛

TEL 075(753)3000

ホームページ <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp>